

<研究ノート>

マックス・ウェーバー (1864-1920)

研究ノート (1)

「社会科学および社会政策的認識の『客観性』」によせて

—— 方法論的基礎・理念型 ——

山 田 隆 夫

方法論的基礎

マックス・ウェーバー (Max Weber) (1864-1920) は、「社会科学と社会政策」雑誌の編集をひきうけた。エドカー・ヤァフェ (Edgar Jaffé), ウェルナー・ゾンバルト (Werner Sonbart), などとともに、このジャーナルの編集者になった。

ウェーバーはこの雑誌に、方法論に関する論文を掲載した。

ウェーバーはこの雑誌は、素人にも、専門家にも役立つ知識をのせる科学的なものでなければならぬと考えた。

ウェーバーは、「すべての国の社会的条件」に関する一般的知識だけでなく、実際的な社会問題研究が含まれなければならぬと考えた。社会政策、社会立法に関する批判的討論の共通の広場であるから、この雑誌は、実践的であるだけでなく、科学的でなければならぬと考えた。政策、立法、科学……これらの目的と、科学的方法の要求とは両立しうるであろうか。これが、ウェーバーの設問である。ウェーバーはこの問に自身で答えようとする。社会科学の起源は実践的であった。社会科学は、以前は応用科学であり、技術であった。ところが、社会科学はいまや、純粋な、アカデミックな科学の性格を帯びてきた。そこで、次の区別があいまいになった。それは存在の知識、「何であるか」と規範の知識「何であるべきか」との区別であった。両者ははっきり区別されねばならない。

ウェーバーだけでなく、寄稿者のすべての課題と責任は、この区別を出

来るだけクリアーにし、明晰にしておくことであった。

雑誌は、「社会—経済的」諸問題をとりあつかうことになっていた。このことが言及しなければならないのは、「人間の物質的・精神的な欲求が充足されなければならないなら、諸条件の欠如が、人間たちに、「計画的な準備と労働、自然との闘い、人間の結合」を（64頁、訳20頁）必要とさせるということである。したがって、このプロセス（過程）に直接でも間接でも関係のあるものは、どんな論文でも、この雑誌の独自の方針にゆだねられる、社会科学の問題を構成することになると、ウェーバーは考えた。

ウェーバーは、この雑誌の方針を説明して、社会生活の「経済的側面」を研究することができる種々の道を探究することであるとしている。

ウェーバーは、経済に関連している側面と厳密に経済的な側面を区別し、ついで、それらのものを経済的に制約された側面とを区別する。これらの区別は、経済の諸問題と諸現象、諸側面の討論に、一層の明晰さをもたらしていることは疑う余地がない。ウェーバーは、これらの区別を、いわゆる史的唯物論に教条的にしがみついていた多くのマルクス主義者たちが見すごしてきたと考えている。

ウェーバーは、〈厳密に、また優れて経済的に〉ということ、つぎの諸制度を指摘している。この諸制度にあっては、経済的側面が、第一義的な意味をもっているし、その諸制度は、熟慮して、経済的な目的のために創られている。銀行、株式取引所、工場など。しかしながら、そのほか、〈それだけでは経済的ではないが、しかし、それでもなお、経済に関連しているといえる相互作用の領域、行為の諸様式、諸制度、事件〉がある。宗教はその例であって、それは、何らかの直接に明瞭な経済的性格をもたないけれども、詳細に検討すると、経済的な行為と発展とに影響する一定の重要性を明示する。ウェーバーは、このことを、種々の宗教倫理と経済との関連について彼自身の研究で証明しようとした。これは論争をひきおこす考え方である。というのは、ウェーバー説では、社会の非経済的秩序は、高度に自律自転するだけでなく、厳密に経済的な側面に意義ある因果的影響をしているというのであり、若干のマルクス主義者たちは、この点を否定しているというのである。そして、最後に、ウェーバーは、〈経済的に制約された諸現象〉について語っている。芸術形態、大衆の芸術的感覚、な

ど。これは、あきらかに、非経済的現象であり、経済的行為にたいするその結果（経済的関連）は、利害がないか少ないかして、とるにたらぬものである。それでも、芸術的感覚があれば、何故にそれらが、特殊の時代に発生したのか、何故に一定のグループが、その感覚を所有しているかなど、これらの何故に (Why) が、「芸術愛好者大衆の社会階層」を分析することによって理解できるというのである。ここで前提になっているのは、「芸術的感覚」は、経済諸制度や事件によって制約されており、影響されているという仮説である。

ウェーバーは、これらの区別をすることと、この区別の基礎をなす社会に関する概念とは、主要な社会諸制度を分析する点で、一層の明晰さを与えてくれると考えた。たとえば、国家は、種々の側面から観察できる。国家が経済活動自体に従事しているかぎり、それは、一部は少なくとも、経済現象である。国家の政策が経済生活に影響をおよぼすかぎり、それは、経済に関連している。最後に、政府は種々の政策が、経済的利害に影響されている程度に、国家は、経済的に制約されている制度である。さて、そこで、明らかなことは、いままで、ルーズに漠然と使ってきた「経済的」という用語は、必ずしも自明でなく、定義することも容易でないということである。

ウェーバーも、マルクスも、「経済的」とは、「物質的な生存闘争」に関係していた。(65頁 訳 65頁)そして、このことは、この雑誌やウェーバー自身の一生の仕事の主要な方向になった。厳密に経済的諸現象だけでなく、経済的に制約された、そして経済的に関連のある諸現象もまた、研究したのである。

「さてわれわれの雑誌は、マルクスやロッシェー以後の社会経済学と同じように、ただ「経済的」な現象ばかりでなく「経済に直接関連する」現象や「経済に制約された」現象をとりあげていく。この種の対象の範囲は、——もちろんわれわれの関心がそのときどきにどういう方向へ向かうかによって、いちがいには定められないが——あらゆる文化事象のすべてにわたることはあきらかである。」(65頁 訳 22頁)。この「経済的」とは、それぞれが、一つの観点であって、その助けによって、人間関係の全く錯そうしたもつれを分析できるし、それぞれの側面の意義が、評価できるの

である。要約すれば、これこそが、ウェーバーの方法論的アプローチであった。すなわち、これら種々のパースペクティブ〈視角〉を用いることにより、また、これらの種々のパースペクティブをできるだけ体系的にかつ客観的に追跡することによって、社会システムとしての全体社会を分析する。ことわっておかねばならないが、ウェーバーは、折衷主義的な方法を提唱しているのではないということである。

ウェーバーや、その他の編集者たちが、この雑誌固有の研究領域を規定して、「人間の共同生活と、その歴史的組織形態の社会経済的構造がもつ一般的な文化的意義とを、科学的に研究すること」(67頁 訳 24頁)がこの雑誌の中心的目的でなければならぬと決定したが、このことは、目的の「一面性」にもかかわらず、大層、実り豊かな規定であるという彼等の共同の認識によるものであった。ウェーバーは、一面性を認めていたが、このパースペクティブ〈視角〉を用いるということは、意図的であるが根拠のあるものであると主張するにいたった。

ウェーバーはつぎのように信じていたからである。すなわち、「われわれは、すべての文化現象が「唯物的」な利害状況の産物ないし函数として演繹される、といった時代おくれの信仰からは自由である。かえってわれわれの信じるところでは、社会現象や文化事象を経済的な観点と意義という特殊な観点のもとで分析することこそ、実り豊かな科学的原理だったのである。そしてドグマにとらわれることなく慎重にことを運ぶならば、事情は今後とも変わることはあるまい。「世界観」としての、あるいは歴史的現実を因果的に説明する公分母としての、いわゆる「唯物史観」は、きっぱりと拒否されなければならない。——とはいえ、歴史の経済的な解釈に従事することは、われわれの雑誌のもっとも重要な目的の一つである。このことには、もっとくわしい説明が必要である。」(68頁 訳 25～26頁)。

マルクス流の説明というドグマ的で通俗な説明の型態に対する反動は、あらゆるドアの錠を開く鍵としてではなく、索出原理として用いられる際の、マルクスの方法の多産性を過少評価する危険をひきおこした。

しかしながら、経済的条件がいかに強力であり、侵透的であっても、「経済的条件だけで説明することが、完全ではありえないと専門家に思い起こさせようとしたり、詭弁をろううたりすることは、余分なことである。

ウェーバーは論じている。経済制度の観点であれ、宗教制度の観点であれ、——彼自身はこの観点から、多くの調査研究をおこなったが——、あらゆるパースペクティブは、部分的で、制限された、必然的に一面的な説明以上ではありえないのである。人は、問題の現象を、その他の、追加のパースペクティブで説明しないで、そこで立ちどまってしまうならば、全面的で複雑な文化全体の理解は、手にいれることはけっしてできない。単一のパースペクティブのもつ固有の一面性を克服したり、回避する方法はない。このようなアプローチの多様性を体系的に用いることによつてのみ、人は、「現実」に、一層適合した知識を得ることができる。現実、その特質と複雑さにおいて無限であるから、十全に把握することはできないにしてもである。一面的なアプローチの正当性の根拠は、それが制限されていても、索出する価値をもっている点にある。さらに、それは、専門家や学者が、共通の概念装置を利用し、そうして、すべての人に学問上の分業の利益を提供することを可能ならしめるので、技術的に便利 (technical expedient) であると正当化されてよい。ウェーバーは、この点で、全面的に、明晰であったわけではない。しかし、ウェーバーは、以下のことを認めている。この方法の基準は、「それが、具体的な歴史事象の因果帰属の説明にとつて価値があることが証明された連関への洞察を提供するのに成功する」その程度の問題であるというのである。(71頁 訳 29頁)。

ウェーバーには、「歴史についての純粹に経済的な解釈のもつ『一面性』と非現実性とは、一般に、文化現象の科学的認識にまったく普遍的にあてはまる原理の、一つの特殊例にすぎない。」(71頁 訳 29頁) ウェーバーは強調する。「文化生活についての、あるいは——おそらくそれよりもやや狭いが、われわれの目的にとつては本質上なんの変わるころのない——社会現象についての、完全に「客観的」な科学的分析というものは存在しない。文化生活ないし社会現象の分析は、いつも特殊で一面的な観点に依存しており、——あからさまなかたちをとるといなとを問わず、意識的、無意識的に——その観点にしたがって研究対象として選択され、区分けして叙述されるほかないからである。」(72頁 訳 30頁)

ウェーバーの議論は、上述との関連において、詳細に検討するとつぎのことを示している。ウェーバーは、自然科学と、彼が保護するのに専念し

ていることは明らかである精神科学との差異（区別）を描きだすのに完全に成功したわけではなかったということである。

あらゆる事物は、——ほとんどあらゆる事物は、社会的——文化的事象の領域ではウェーバーに従えば、独特な方法的諸問題を示したが、原理上は、すくなくとも、一般的な科学的方法に適合的でありうる。しかしこれは、文化の領域では、課題がさらに複雑になるであろうことを否定することにはならない。自然科学でも社会科学でも、「全面的」現実を把握することはできない。自然科学の場合でも社会科学の場合でも、ある種の抽象が必要である。そして、この抽象は、問題、事象、研究すべき関連の選択とともに、ある程度、調査者、そのスポンサー、その他の価値にもとづいている。そして、ウェーバーは、自然事象のすぐれて量的な諸側面と比較して、社会科学での第一の関心事としては社会—文化事象の質的な諸側面を理解したが、ウェーバー自身は、「こうした区別自体は、ちょっと見た感じとはちがってそれほど原理的なものではない」（74頁 訳 33頁）と認識している。あきらかに、自然科学は、量的カテゴリーと、質的カテゴリーを同様に用いる。そして、社会科学のなかでも、経済学は、量的カテゴリーと、質的カテゴリーの両方を用いる顕著な例である。ウェーバーは、文化事象と自然事象とのあいだには、決定的な差異があり、そこで、文化科学と自然科学との、それぞれの方法論的要求のあいだに、決定的な差異があるという見解を維持した。ウェーバーの議論によれば、「文化現象形成の意義やその意義の根拠は、法則概念の体系がどんなに完全につくられたとしても、そこからひきだすことはできないし、それによって基礎づけたり理解したりできるものではない。なぜならそこでは、文化現象の価値理念への関係が前提されているからである。文化の概念は価値概念である。」（76頁 訳 35頁）。

ウェーバーは、この主張を擁護するために議論を展開する。その議論の全部とはいわないが大部分は、自然科学にも平等に妥当すると考えることができる。ウェーバーが、（1）現実の断片は、それらとの価値関連のゆえにわれわれに意味がある。（2）現実の部分は、われわれの諸価値に関連しているので、われわれにとって意味がある。（3）経験的なデータの「前提のない」調査は不可能である、という。これらのことは、自然事象の研

究にも、同様に正当ではなかろうか。自然科学史から一例をとろう。こんにち、太陽系とよばれているものの地球中心的な見方がなにゆえに永いあいだ支配的であったのか、同様に、なにゆえ、それが、最後には打倒されてしまったのかという理由は、それぞれに、地球中心的または太陽中心的な見方の価値ならびに利害関連において追求されなければならない。さて、ウェーバーは、何故、文化諸科学の独自の方法を要求しつづけたのであろうか。

ウェーバーは、利害に関連して、「法則」について議論している。彼は、仮説的な法則は索出手段として大きな価値をもっていると信じていた。文化事象は法則ならびに一般概念の見地から分析することができる。しかし、これらの事象の意義や意味は、一般法則の手段によって理解できない。ウェーバーの、これに関連する多くの主張の意義を理解することは、必ずしも容易なことではない。それはしばしば矛盾しているようにみえる。それにもかかわらず、ウェーバーの主張の意義を見出そうと試みることで、その重要な洞察は救い出す価値がある。

ウェーバーは、自然科学と同様、社会科学においても、規則性の知識とといったような一般的な命題が、要求されていることを認識している。それゆえ、「諸法則」を定式化しようと試みることは、社会科学では全く正当である。ウェーバーは、どんな科学でも、法則がなければ、不可能であると認めている。しかし、彼は、さらにつきのように主張する。「文化科学においては、一般的なものの認識はわれわれにとって、けっしてそれ自身のために価値をもつわけではない。」(80頁 訳 40頁)そして、「文化事象の『客観的』な取扱いということが、経験的なものを「法則」へ還元することこそ科学研究の理想となる目的とされなければならない、という意味でいわれるとすれば、そういう『客観的』研究は無意味である。」(80頁 訳 40頁) ウェーバーは主張する。無意味であるということとは、「たとえば、文化事象ないし精神的な事象が、『客観的』には、法則に支配されない、という理由」からではない。「それは他の理由のゆえに意味がない。」(80頁 訳 40頁)

ウェーバーが挙げる第一の理由は、注意深く厳密にせんさくをおこなえば、おそらく、永続きしないであろうことがわかる。「…社会法則の認識

は、社会的現実の認識ではなくて、われわれの思考が現実を認識するために利用する、さまざまな補助手段の一つにすぎない。」(80頁 訳 40頁)。今日、大部分の科学哲学者たちは、自然科学であれ、社会科学であれ、何らかの「法則」は、事実上、必ずしも、「現実」とのなんらかの対一の関係をもっているものではない補助手段であると論じている。

ウェーバーの挙げる第二の理由は、これまた評論対象になりやすいものであるがさほど弱点はないであろう。「文化事象の認識というものは、いつも個性的な特色をもった生の現実が、特定の個別的な関係のうちでわれわれにたいしてもつ意味を基礎にしなければ考えられないからである。しかしそれがどういう意味であり、どういう関係であるのかをあきらかにしてくれるのは法則ではない。それは、個々のばあいにはわれわれがどういう価値理念にもとづいて文化を観察するかによってきまる。」(80頁 訳 40頁)。

ウェーバーがこう主張するとき、これは、説得力がある。ここで、ウェーバーは、自然科学よりも社会科学では、調査の過程に価値ならびに利害がより一層深く影響するという命題以上のあることを主張しているように見えるからである。ここで、彼にとって重要であるのは、問題の「現実の特徴的なユニークさ」に焦点が当てられているという点である。実際に、利害があり、意義があるのは、このところであって、利害があり、意義があるのは、索出的手段であるにすぎない一般的理論的命題ではないのである。

ウェーバーが好んだ例をあげよう。物質的生産関係が、社会の他の諸側面の特徴を決定するというマルクス主義的命題がそれである。ウェーバーは、この命題が、時間と空間とにかかわらず、普遍的に妥当する法則ではないと論じた。ウェーバーには、この命題は、歴史的——文化的に特殊な命題である。この命題は特殊な文化環境に妥当するかどうか、またどの程度にかという、経験的問題であるにとどまる。さらに、ウェーバーには実に興味深いことは、この命題が、いかに、特殊な環境において、それ自体で作用するかということである。この特殊な環境は、一般理論の基礎にもとづいて、前もって認識することができないからである。さらに興味あることは、いわゆる「経済的要因」——この用語自体が、社会的行為のあ

る側面の不当な具象化である——の意味と意義とは、ある場所と他のある場所では異なるのである。研究のために、ばらばらになっている文化の他の諸側面のすべての意義が異なるのと同じである。これは、自然科学の状況と全く異なることである。たとえば、自然科学では、動力の法則は、実際に普遍的に妥当する法則であるので、引用符を全く必要としないのである。

ウェーバーは、結論的分析でつぎのように書いている。

「上述したところからあきらかなように、文化的現実についてのあらゆる認識は、いつもただ特殊な観点のもとでの認識である。もしわれわれが歴史家や社会研究者にたいして、重要なものと重要でないものとを区別できなければならないとか、この区別をするために必要な「観点」をもたなければならないとかを、基本的前提として要求するとすれば、それはただつぎのようなことをいっているにすぎない。つまり歴史家は、現実の成り行きを——意識的無意識的に——普遍的な「文化価値」に関係づけ、それによって、われわれにとって意義のある連関を選びだすことができなければならないのである。」(81—82頁 訳 41頁)。

意義の基準は主観的である。「しかしだからといって文化科学的研究は、ある人に妥当するがある人には妥当しないという意味で「主観的」な成果しかあげられない、ということにはむろんなりはしない。変化するのはむしろ、ある人は興味をもつが、他の人はそれほどでもない、という関心の程度である。」(84頁 訳 44頁)

ウェーバーの方法論に関する論文において、興味ある諸問題がうかびあがってくる。「精密自然科学にとっては、「法則」は普遍的であればあるほど、重要さと価値も大きくなる。それにたいして歴史的現象を、その具体的前提にさかのぼって認識しようとするばあいには、もっとも普遍的な方法は、もっとも内容の乏しいものであるからして、きまってもっとも価値の少ないものとなる。なぜなら類概念の——その外延の——妥当性が広ければ広いほど、われわれは現実の豊かさから遠ざかることになる。類概念

に、できるだけ多くの現象に共通したものを包摂しようとするれば、ますます抽象的になり、内容の乏しいものにならざるをえない。」(80頁 訳 39-40頁)。ウェーバーはいつている。「文化科学においては、一般的なものの認識はわれわれにとって、けっしてそれ自身のために価値をもつわけではない」。(80頁 訳 40) さらに、この一般化は意義深い本質的な差異をあいまいにしてしまうという。ウェーバー自身が論じたが、社会現象を一般化しうることは確かである。彼は、『世界宗教』の研究において、アジアの諸宗教の総括に専念した。その諸宗教は『合理的な世俗内的倫理』を展開していないことを示し、さらに、そのための諸条件の欠落の歴史的意義と意味をあきらかにした。しかし、一般化が興味深いのは西洋の合理的倫理にウェーバーが与えた意義による。『プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神』などの諸論文は、今後の筆者の研究課題であろう。

ウェーバーによると、高い水準でない一般化が宗教的行為、現象、制度などについておこなわれた場合、いろいろな歴史的文脈で、これらの現象が具体的に採る多様な諸形態を考察することができる。イスラム教の托鉢僧、入神の境地の人々 (ecstatics)、疑似予言者運動 (quasi-prophetic movements) ですら、多様な文化に現象している。しかし、この水準で研究がストップしてしまうなら、ユダヤ人の予言の独自性、その西洋文化の発展にたいする意義は把握できない。ウェーバーは、古代イスラエルの独自の諸条件を忍耐強く、厳密に分析することで、その特色と、中国ならびにインドの宗教制度との基本的な対照とを、暴露している。これが筆者の研究課題となる。ウェーバーは、社会学者であり歴史学者であった。諸文化の特徴を区別することに関心を示したのである。古代ユダヤの宗教、中国の宗教、インドの宗教、朝鮮、日本の宗教の諸研究に、ウェーバーを先達として筆者も参加して、今日のそれぞれの民族の歴史的文脈、そのエートスに接近したいものである。

ウェーバーは、特定文化の現実の豊富な諸特徴を追求することで、一つの陥し穴にはいりこまないだろうか。木をみて森をみないことにならないか。これは極端にまで進んでいくと高い水準の抽象と同じように、成果をもたらさないものにならないかという疑問が筆者にある。ウェーバーは、自分自身が、こまかい点に没頭してしまって、自分の調査目的を忘れてし

まったのではないかという印象が残る。もちろん、われわれの観点で、ウェーバーの成果を独自に利用すれば、ウェーバーの成果は、実り豊かなものではなからうか。ウェーバー著、『世界宗教』から、われわれは、多くを学ぶうるのではなからうか。

ウェーバー著『プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神』は、一つのヒントを与えてくれる。プロテスタンチズムの倫理に関するそのテーゼは、何らかの一般法則から演繹することができないであろう。ウェーバーが、この倫理に帰した意義は、一定の歴史の文脈にだけに、資本主義の起源と発生にだけ妥当した。ひとたび、近代経済体制が確立し、強固になってしまうと、プロテスタンチズムの倫理の意義は消失してしまい、彼の表現では、廢物になってしまった。資本主義の発生は、何らかの法則から演繹できない。それは、歴史的に不可避ではなかった。筆者が注目したいのは、ウェーバーは、資本主義の発生を説明できる歴史的必然性は存在しないといっていることである。近代資本主義は、個別的歴史的発展の多様性の相互作用の収斂の所産であるとのテーゼを展開していることである。

マルクスは、資本主義の起源と発展の法則が、歴史的・文化的に独自であって、西洋の一定の時期に関連するもので、時間と空間を超えて諸々の社会に一般的に関連するものではないと理解しなければならないとしている。マルクスは情熱的に否認しようとしたのは、彼が強調していたこと——それは一定の歴史的環境のもとでは正しいと信じていた——を、一つの普遍的な「法則」にかえようとする試みであった。ミハイロフスキーあての手紙で、このような試みを否認し、拒否している。西洋における資本主義の起源に関するマルクスのスケッチを、「あらゆる民族が通過すると運命づけられている普遍的な道についての、歴史的・哲学的理論にすることを拒否している。「歴史的環境がどうであろうとも、道が存在する」という図式主義を拒否している。このような歴史的、哲学的理論への転換について、「私に敬意をあらわしているがまただましている。」といっている。

マルクスは別の手紙で、「運動の『歴史的不可避性』(資本主義の発生)は明白に西洋の諸国にはっきりと限定されている。」と書いている。ウェーバーは、マルクスとこの点で一致していた。中国やインド、その他のアジアの諸地域での、土着の資本主義の発展の欠如の理由は、あらゆる複雑な

諸側面における社会にたいする経済を調査することによってのみ解答を与えうる経験的・歴史的問題であるということである。マルクス自身は、著作、論文その他で、「アジア的生産様式」の諸問題という形で、この問題を取扱っている。岩波書店、本田喜代治編『アジア的生産様式の問題』などもあわせて、筆者の今後の研究課題である。ウェーバーの『世界宗教』論、中国、インドの宗教論、古代ユダヤ教論等々、宗教を通しての社会・民族研究をおこなって、世界諸民族の発展とその宗教倫理、エートスを考察したい。

マルクスが接近し、ウェーバーが取り組んだこの課題を、19世紀から20世紀へそして、一世紀後の今日、20世紀から21世紀への世紀転換、つまり、諸民族の平和と自由と民主と独立への繁栄の転換の時期に取り組みたい。

(1990・9・1)

理 念 型

ウェーバーは、歴史家であり、また社会学者であった。歴史家として、文化の諸要素が、特殊な文化の文脈において帯びる、文化の諸要素の独特な諸形態と諸結合とに興味をもっていた。社会学者として、種々の社会現象に関する一般化にも同じように興味をしめした。

ウェーバーが、この目的のために用いた概念道具の一つが、かの有名な理念型構成である。問題の現象にますます適合的になる一概念が、かかる構成の助けによってのみ、構成から経験的現実へ移動し、それから構成へかえり、従って構成を変化させてのみ獲られるようになる。ウェーバーは、この道具を採用したとあえていわねばならない。この道具の使用は、ウェーバーをもって嚆矢とするものではないからである。ウェーバーは、ここでもまた、この仕掛を用いた先行者たちの多くから、とくにマルクスから学んだのである。ウェーバーがマルクスを知っていたことはまちがいない。

調査員の意図、観点、価値等々によるので「どういう諸特質を特定の文化の理想像のうちへとり入れるべきかを撰択するばあいにも、そこに適用される原理はまったく多種多様だということになる。」(91頁 訳 53頁)

近代経済生活の諸側面、貨幣交換、自由競争、合理的行為に関心を示す人は、そのさい、それでもってこれらの現象を思惟するある種の分析的な構成が必要になる。

ウェーバーは書いている。

「内容のうえからは、この思惟構造は、ユートピアという性格をおびており、現実のうちの特定の要素を、思惟のうえで強調してとりあげることによって得られたものである。この思惟像が、経験的にあたえられた生活現実とのあいだに何かの関係をもつとすれば、それはただつぎのような意味においてである。この思惟像のうちに抽象的にしめされている種類の諸関連、つまり「市場」に依存している諸事情がなんらかの程度で現実のうちにはたらいっていると確認ないし推測されるばあいにはわれわれはこの連関の特性を理念としての典型に照らして、実例的に目のあたりにしたり、理解したりすることができるのである。」(90頁 訳 51頁)。

第一に、理念型は、まだ仮説ではない、けれども、「理念型は、仮説構成に方向を与えようとする。それはまた現実の叙述ではないけれども、叙述にたいして一義的な表現を提供しようとする」。(90頁 訳 51頁)。

ウェーバーが、少なくとも出発点として心中に描いていたものは、仮説でもなく、「平均」でもなく、さらに忠実な現実でもなく、それはまた、「あるべき」もののモデルでもなかった。それはむしろ、「研究者が問題の現象の本質的な特徴ならびに傾向であると考えたところのもの一つの強調」(ザイトリン)であった。この手段の使用に伴っておこりうる陥し穴は、(1) 人は構成と「実際の現実」とを混同するかもしれないということ、(2) 人はその構成を、データをばそのなかにねじこんでしまうプロクルストスのベッドとみなすかもしれないということ、(3) 人は理念を実体視するかもしれないということである。これらの危険が回避されるならば、理念型は、「それでもって現実に立ち向かう有効な手段になることができるのである。」(ザイトリン)。(Irving M. Zeitlin, IDEOLOGY AND THE DEVELOPMENT OF SOCIOLOGICAL THEORY 1968 p. 120)

しかしながら、理念型は、「凍結状態」にある現実の側面を強調することであると限定する必要はない。理念型構成には、発展する連続もまた位置

づけられはめこまれるであろう。たとえば、人が発展の諸段階について語り、これらの発展が、相対的に任意な知的構成物であるということをしっかき心にとめているならば、諸段階と発展する連続との理念は、りっぱに、索出的価値をもちうるのである。さらに、理念型はまた、仮説として、定式化することもできる。

ウェーバーは、マルクスをよく知っていて、一般に、いわゆる理念型の最も実り豊かな使用は、マルクスの労作に実例があると信じていた。マルクスとウェーバーの関係を見よう。

「これまでわれわれは、おもうところあって、理念型的な構成のうち、われわれにとってとくに重大な意味をもつ事例を、表だってとりあげるのを避けてきた。それはマルクスのばあいである。なぜとりあげないできたかという、それはマルクス解釈をひきいれることで、論議がいっそう複雑になるのを避けようとしたためであり、またこの雑誌の論議のなかでは、この大思想家を主題としたり、関連してふれたりする論文が、各号ごとに批判的分析の対象となるだろうから、くわしくは、それに任せようとしたためである。したがってここでは、マルクス主義特有の「法則」や発展の構成も——それが理論的に誤りをおかしていない以上——もちろん理念型的な性格をもつ、ということだけを確認するだけにしておこう。こういう理念型は、それを現実とつきあわせて比較するために利用されるばあいには、すぐれた、他に類のないほどの検索的 (heuristic) (筆者は、索出的と訳してきた) な意義をもつが、経験的に妥当するとか、実在する (つまり実は形而上学的な) 「作用」や「傾向」などと考えられるとすれば、危険なものとなってくる。このことは、マルクス主義の概念を取り扱ったことのある者ならば、だれでも知っているところであろう。」(103頁 訳 67頁)。以上のウェーバーのマルクス評は、全部を引用するにたる重要性があると思われる。

ウェーバーは、マルクスの抽象の方法、特に、マルクスの二階級モデルを、現代の経済体系の性質に重要な洞察を与える方法であるとみなした。マルクスが、物質的生産手段の支配の位置に重要性を付与したのと同じように、ウェーバーは、政治、軍事、科学の諸制度の分析において、行政、権力、そして調査の手段の支配の位置に注目した。ウェーバーはいいい

る。

「権力による支配を維持するために、経済的組織とおなじように、一定の物質的な財産が必要である。あらゆる国家は、人材自身が行政手段を所有しているという原理に国家が依拠しているかどうか、または人材が行政手段から『分離』しているという原理に国家が依拠しているかどうかにしたがって分類されるであろう。この区別は、つぎと同じ意味で通用する。すなわちわれわれは、給料で雇用されるもの、つまり資本主義企業内のプロレタリアートは物質的な生産手段から『分離』しているといっているのも同じ意味においてである」。 (Max Weber, From Max Weber: Essays in Sociology, Translated, Edited, And With Introduction by H. H. Gerth and C. Wright Mills (New York; Oxford University Press, 1958)

マルクスは、生産手段の集中の拡大と、その結果としての、生産手段からの労働者の分離を観察し、同様に生産手段を所有し統制する人々と、所有せず統制しない人々との分化が発生するのを観察した。これに対して、ウェーバーは、行政手段、暴力手段、調査手段等々の集中の拡大に注目した。こうして、ウェーバーは、マルクスが生産の領域での特殊な場合としてドラマ化した傾向は、より一層、一般的な過程の部分とみることができるであろうと論議したのであった。

「官僚制は支配者の手中への物質的な管理手段の集中と手をたずさえて進んでゆく。この集中は、たとえば、巨大な資本主義企業の発展において、よく知られた典型的な形で発生する。資本主義的大企業は、その本質的な特徴をこの過程にみいだすのである。これと対応する過程は、公共の組織に発生する」。 (Ibid p. 221)。そして、さらに、「現代戦は、機械の戦争であり、これは武器弾薬庫を技術的に必要なものとする。あたかも産業における機械の支配が、生産と管理の手段の集中を促進するのと同じである。」 (Ibid. p. 221) そして、最後の例であるが、「科学の研究と教授の領域において、総合大学の常設研究所の官僚制化は、物質的な管理手段の需要の増加の一機能である。権威ある研究所長の手中へのこのような手段の集中をとおして研究者ならびに私講師の大衆は、彼等の『生産手段』から分離し

ている。あたかも、同じやり方で、資本主義的企業が、労働者を彼等の生産手段から分離したのと同じである。」(Ibid. pp. 223-24)

このアプローチは、現代文明の諸制度と傾向について実に有意義な観察にウェーバー、マルクス、そしてわれわれを導いていく。

しかしながら、ウェーバーの方法論の記述は、それだけでは、人が人間の事象の研究で科学的方法をもっともよく使用するには、どうしたらよいかについて、ウェーバーは、何か混乱し、矛盾しているという印象を残している。ウェーバー自身が述べているが、「信仰から科学を分離しているのは、ただ紙一重である。」(Weber Methodology p. 10) ウェーバーの純粋に方法論的な著述よりもさらに興味があるのは、彼の実際の歴史——科学的研究である。そして、ウェーバーの方法の評価にとって、この歴史——科学的研究もまた重要である。実質的な問題の研究における彼の方法上の手続きが観察できるのは、これらの研究であるので、今後こちらの方に進んでゆこう。『プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神』を取扱いたい。

(1990・9・1)

参 考 文 献

1. Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre* 4 auflage J. C.B MOHR (PAUL SIEBECK) TÜBINGEN.
2. THE METHODOLOGY of the *Social Sciences* Max Weber Translated and Edited by EDWARD A. SHILS and HENRY A. FINCH with a Foreword by EDWARD A. SHILS The Free PRESS, New York.
④引用頁数はこの本からのもの。
3. 現代社会学大系 5 ウェーバー『社会学論集——方法・宗教・政治——』濱島朗・徳永恂訳 1971 青木書店。
④訳書引用頁数はこの本の頁数である。
4. Irving M. Zeitlin Indiana University Bloomington, Indiana
IDEOLOGY AND THE DEVELOPMENT OF SOCIOLOGICAL THEORY PRENTICE—HALL, Inc, Englewood Cliff, New Jersey
5. 阪南大学 阪南論集 社会科学編 第17巻 第3号(1982)の山田隆夫訳
マックス・ウェーバー, I. M. Zeitlin の上記著書の Max Weber の章の訳。
6. Gerth and Mills *From Max Weber Essays in Sociology* Translated, Edited, and With an Introduction by H. H. GERTH AND C. WRIGHT MILLS.